

やまなし

医療最前線

県立中央病院から

《 144 》

近年、さまざまな抗がん薬が登場し治療対象となる疾患が拡大する中、患者への治療内容や副作用の説明、抗がん薬の適切な調製など、安全な化学療法実施に薬剤師が関わる必要性が高まっている。県立中央病院は都道府県がん診療連携拠点病院として、院内だけでなく県内の化学療法の質向上を推進していく。

薬剤部の山本誠一部長によると、同病院は抗がん薬治療を、複数の医師や薬剤師、看護師らで構成する委員会で審査・承認された治療計画に基づいて実施。主治医が患者ごとにオーダーした抗がん薬の投与量や休薬期間を薬剤師が確認し、適正な



山本誠一
薬剤部部長

がん化学療法の質向上推進

治療に努めている。

2010年から、看護師に代わって薬剤師がほぼすべての抗がん薬の調製を担当。無菌室で衛生的に調製を行うほか、抗がん薬の調製鑑査システムを導入し、薬剤や調製量に間違いがないか確認するなど安全面にも配慮している。

13年1月の通院加療がんセンター開設に伴い、外来で抗がん薬治療を行う患者は年々増加。5年前に比べ、全調製件数のうち外来の占める割合は72%から

82%に増えた。近年、新規薬剤の使用によって吐き気や嘔吐などの副作用が軽減され、通院で治療可能な患者が増えているという。

同病院は県内で唯一、がん化学療法の専門的知識を持つがん薬物療法認定薬剤師2人を配置し、通院加療がんセンターで患者に抗がん薬の説明を行っている。副作用に対する適切な処方を提案するなど、患者が安心して治療を受けられるよう医師、看護師らと連携。今後は、より専門性の高いがん専門薬剤師の養成を目指すとともに、県内の薬剤師全体のレベルアップを図る研修会の実施も予定している。

県立中央病院の外来抗がん薬調製件数と患者数



山本部長は「院内の安全かつ適切ながん治療の推進だけでなく、県内でがん治療に関わる多くの病院薬剤師の指針になれるよう努力していきたい」と話している。

第2、4木曜日に掲載します